

二級河川安原川広域河川改修事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

野々市市

三日市A遺跡

2012

石川県教育委員会
(財)石川県埋蔵文化財センター

みっかいち
三日市A遺跡

2012

石川県教育委員会
(財)石川県埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は三日市A遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は、石川県野々市市（旧石川県野々市町、平成23年11月11日町制から市制に移行）三日市町地内である。
- 3 調査原因は二級河川安原川広域河川改修事業であり、同事業を所管する石川県土木部河川課が石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は、財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて、平成18(2006)年度から平成23(2011)年度にかけて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書刊行である。
- 5 調査に係る費用は石川県土木部河川課が負担した。
- 6 現地調査は平成18年度及び平成19年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者（当時）は下記のとおりである。
 - (1) 第1次調査
 - 期 間 平成18年8月3日～同年9月4日
 - 面 積 480㎡
 - 担 当 課 調査部調査第3課
 - 担 当 者 宮川勝次（主任主事）、大路葉子（調査嘱託）
 - (2) 第2次調査
 - 期 間 平成19年8月20日～同年9月18日
 - 面 積 490㎡
 - 担 当 課 調査部調査第2課
 - 担 当 者 安中哲徳（主任主事）、山下陽介（調査嘱託）
- 7 出土品整理は、平成19（2007）年度に実施し、企画部整理課が担当し実施した。
- 8 報告書原稿執筆・編集は平成22年度に調査部特定事業調査グループが実施し、米澤義光（特定事業調査グループリーダー）が担当した。
- 9 報告書刊行は平成23年度に実施し、調査部特定事業調査グループが担当した。
- 10 調査には下記の機関の協力を得た。

石川県土木部河川課安原・高橋川工事事務所、野々市市教育委員会、野々市市北西部土地区画整理組合
- 11 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 12 本書についての凡例は下記のとおりである。
 - (1) 方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅷ系に準拠した。
 - (2) 水平基準は海拔高であり、T.P.（東京湾平均海面標高）による。
 - (3) 出土遺物番号は挿図、写真が符号する。

目 次

第1章 経 過	1
第1節 調査の経過	1
第2節 発掘作業の経過	1
第3節 整理等作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の方法と成果	6
第1節 調査の方法	6
第2節 基本土層	6
第3節 平成18年度調査の遺構と遺物	6
第4節 平成19年度調査の遺構と遺物	8
第4章 総 括	16

挿 図 目 次

第1図 調査区の位置	3	第6図 平成19年度調査区遺構全体図	12
第2図 遺跡の位置	4	第7図 平成19年度調査区遺構図(1)	13
第3図 周辺の遺跡	5	第8図 平成19年度調査区遺構図(2)	14
第4図 平成18年度調査区遺構全体図	10	第9図 出土遺物実測図	15
第5図 平成18年度調査区遺構図	11		

表 目 次

第1表 遺跡地名表	5
-----------	---

図 版 目 次

図版1 三日市 A 遺跡遠景	図版4 平成19年度調査
図版2 平成18年度調査	図版5 出土遺物
図版3 平成18年度調査	

第1章 経 過

第1節 調査の経過

発掘調査は、二級河川安原川広域河川改修事業を調査原因とする。事業は石川郡野々市町（本章においては全て当時の呼称による。平成23年11月11日より野々市市）二日市町・三日市町周辺で新規河川掘削工事を行うものである。石川県教育委員会文化財課では、毎年、開発関係部局に対して次年度開発予定事業の照会を実施しているが、本事業も平成18年1月30日の「平成18年度埋蔵文化財調査等に関する協議会」にともなう開発部局への照会により知られたものである。

新規河川掘削工事箇所は、野々市町北西部土地区画整理事業区域内であり、町教育委員会が事業区域65.4ha内を平成11年9月27日～同年10月19日に分布調査した。その結果、以前より存在が確認されていた二日市イシバチ遺跡、三日市A遺跡、三日市ヒガシタンボ遺跡、郷クボタ遺跡、徳用クヤダ遺跡の5遺跡の遺跡範囲が確定し、平成11年10月28日付け文書で町教育委員会教育長から町産業建設部長宛に5遺跡存在の回答がなされた。これを受けて町教育委員会、町都市計画課、土地区画整理組合が、遺跡範囲内の道路等建設工事部分と十分な保護層が確保できない部分の調査を行うことで合意した。平成12年4月13日付けで町教育委員会と北西部土地区画整理組合の間で、土地区画整理事業地内における埋蔵文化財調査の協定書が交わされ、平成13年度から町教育委員会が発掘調査を開始している。

区画整理事業地内で行われる安原川河川改修事業について県文化財課では、区画整理に係る発掘調査を町教育委員会が既に実施していたことから、発掘調査の合理性や埋蔵文化財の保護・活用等の観点から、町教育委員会が発掘調査することが望ましいと考えていた。これに対し、町教育委員会と土地区画整理組合では、河川改修事業が県事業であることから、本事業に係る三日市A遺跡および二日市イシバチ遺跡の調査については県が実施すると考えていた。両遺跡の取り扱いについては、平成18年1月31日に県文化財課と町教育委員会との間で協議が行われ、町教育委員会は他の区画整理や開発行為に伴う発掘調査が多く、二級河川安原川広域河川改修事業関係の遺跡調査の実施が困難である旨説明。協議の結果、三日市A遺跡の発掘調査は県教育委員会が実施することになり、その後県文化財課は県土木部河川課と調整を進めた。三日市A遺跡については、県土木部河川課からの依頼を受けた県教育委員会の委託事業として、財団法人石川県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。現地調査は平成18・19年度に、出土品整理・報告書刊行事業は平成19・22・23年度に実施した。

第2節 発掘作業の経過

平成18年度に480㎡の、平成19年度に490㎡の調査を実施した。

（平成18年度）

①調査体制

調査期間 平成18年8月3日～同年9月4日

調査主体 財団法人石川県埋蔵文化財センター（理事長 中西吉明）

総 括 前田 憲治（専務理事）

事 務 山下 淳映（事務局長）

総務 宅崎 仁芳（総務課長）
経理 熊谷 省吾（経理課長）
調査 谷内尾晋司（所長）
湯尻 修平（調査部長）
藤田 邦雄（調査第3課長）
担当 宮川 勝次（調査第3課主任主事）
大路 葉子（調査第3課調査嘱託）

②作業経過

調査区は南北に分かれ、北側を調査区北、南側を調査区南と呼称した。8月3日から調査区の表土除去を開始し、8月7日から作業員を投入し調査区南の遺物包含層掘削と遺構検出作業にかかり、8月11日に遺構を完掘した。8月17日から調査区北の遺構検出作業にかかり、8月25日に遺構掘削を完了した。8月29日から8月31日に遺構平面図実測作業を終え、平成18年9月4日調査を完了した。

（平成19年度）

①調査体制

調査期間 平成19年8月20日～同年9月18日
調査主体 財団法人石川県埋蔵文化財センター（理事長 中西吉明）
総括 前田 憲治（専務理事）
事務 山下 淳映（事務局長）
総務 宅崎 仁芳（総務課長）
経理 熊谷 省吾（経理課長）
調査 谷内尾晋司（所長）
湯尻 修平（調査部長）
西野 秀和（調査第2課長）
担当 安中 哲徳（調査第2課主任主事）
山下 陽介（調査第2課調査嘱託）

②作業経過

平成19年8月7日に三日市A遺跡現地にて、石川県土木部河川課安原川・高橋川工事事務所、県文化財課、(財)石川県埋蔵文化財センターの各担当者が事前打合せを実施した。調査は8月20日から東側調査区のA区と西側調査区のB区の表土除去を開始した。8月20日から作業員も投入し遺構検出を行い、以後遺構掘削を進め、9月10日に空中写真測量を実施し、平成19年9月18日調査を完了した。

第3節 整理等作業の経過

・出土品整理

平成19年度に実施した。

整理期間 平成20年1月8日～同年1月16日
整理主体 財団法人石川県埋蔵文化財センター（理事長 中西吉明）
総括 前田 憲治（専務理事）
事務 山下 淳映（事務局長）
総務 宅崎 仁芳（総務課長）

- 経 理 熊谷 省吾 (経理課長)
整 理 谷内尾晋司 (所長)
垣内光次郎 (整理課長)
担 当 安中 哲徳 (調査第2課主任主事)
宮川 勝次 (調査第3課主任主事)

・報告書作成

平成22年度に調査部特定事業調査グループが担当した。作成は米澤義光 (特定事業調査グループリーダー) が行った。

・報告書刊行

平成23年度に特定事業調査グループが担当した。



第1図 調査区の位置 (S=1/5,000)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

三日市A遺跡は、平成18年度調査区が野々市町北西部土地区画整理事業24街区1番、62街区30番地先、平成19年度調査区は同31街区2番地内に所在する。野々市市は旧野々市町が平成23年11月11日に市制移行した県内第11番目の市である。石川県のほぼ中央部に位置し、北東部は金沢市、西南部は白山市と接している。手取川扇状地の北東扇状部から扇端部の南北6.7km、東西4.5km、面積13.56km²の市域を有し、近年は市の南北地区で土地区画整理事業が進展、都市計画道路などの整備が進み、平成22年10月の国政調査で人口5万人を超えるなど、市街地が拡大している。

市域は、手取川扇状地の北東部に位置する平坦地形であるが、縄文時代から古墳時代にかけて手取川から派生した小河川が蛇行北流していた。小河川が洪水と氾濫を繰り返し、その結果南北に島状微高地が形成され、遺跡はその微高地上に形成されている。



第2図 遺跡の位置

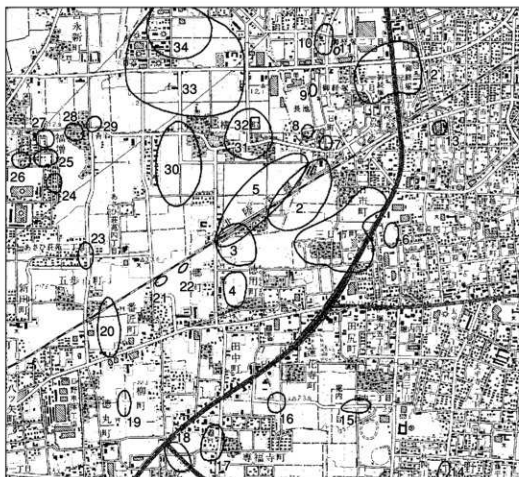
第2節 歴史的環境

三日市A遺跡の周囲には縄文時代から中近世までの遺跡が分布する。縄文時代の主要遺跡には御経塚遺跡が存在する。縄文時代後・晩期の大集落跡で竪穴建物、環状木柱列、多量の土器や石器が出土している。

弥生時代では後期になり周囲に集落が増加してくる。本遺跡も含め三日市ヒガ Stantonボ遺跡、二日市イシバチ遺跡、徳用クヤダ遺跡、郷コボタ遺跡、五歩市遺跡などが存在する。

古墳時代に入ると遺跡数は激減するが、野々市市教育委員会が調査した二日市イシバチ遺跡地区で7基の方墳が、御経塚シンデン遺跡でも15基の前方後方墳・方墳からなる前期古墳群が確認されている。

奈良・平安時代になると手取川扇状地扇状部で政治勢力を背景とした新規開発が始まる。その一つに7世紀第三四半世紀に建立された末松庵寺が存在する。8世紀には横江荘遺跡が存在する。横江荘遺跡では8世紀第3四半期～10世紀中頃の東大寺領であった時期の掘立柱建物や欄列など管理施設と考えられる遺構が検出されているが、近年新たに遺跡東側で回廊状大型区画施設等が検出され注目されている。10世紀代の集落遺跡で瓦塔が出土し公的施設の存在が指摘されている徳用クヤダ遺跡や、町調査区から古代北陸道と考えられる道路状遺構が検出された三日市A遺跡・三日市ヒガ Stantonボ遺跡が存在する。このほか古代では、三納アラムミヤ遺跡、栗田遺跡、下新庄アラチ遺跡、上林新庄遺跡などが存在する。中世では扇状地開発に乗り出した在地武士の林氏と富樫氏が台頭し、林氏は野々市市城南部から鶴来地区、富樫氏は野々市市東部から伏見川を地盤とするも、承久の乱(1221)後は富樫氏が台頭し建武2年(1335)富樫高家が加賀国守護職に任ぜられ、館を構えた。中世の遺跡には三日市A遺跡以外に扇が丘ゴシヨ遺跡、三納ニシヨサ遺跡、二日市イシバチ遺跡等が存在する。



(国土地理院発行の2万5千分の1地形図(金沢)を使用)
第3図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

番号	遺跡番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡番号	遺跡名	種別	時代
1		三日市A遺跡	集落	弥生 古代 中世	18	08045	坂道跡	集落	縄文~近世
2	16024	二日市イシバチ遺跡	集落	弥生 古墳 中世	19		徳丸ジョウジヤダ遺跡	集落	弥生~古代
3		郷ツボク遺跡	集落	古代 中世	20	08111	五歩市遺跡	集落	弥生~近世
4		徳用キヤダ遺跡	集落	古代 中世	21		香区遺跡	集落	古代 中世
5	08141	横江D遺跡	集落	弥生 古代 中世	22		香区藤原遺跡	集落	古代 中世
6		三日市ヒギシタンゴ遺跡	集落	弥生 古代 中世	23	08112	あさひ荘遺跡	散布地	古代
7	16025	長池キタハリ遺跡	集落	縄文 古代	24	08118	宮永市城田遺跡	散布地	古代
8	16026	長池ニシタンゴ遺跡	集落	縄文 弥生 中世 近世	25	08120	宮永はじ川遺跡	館跡・墓場	中世
9		御経塚オッコ遺跡	集落	弥生	26	08119	宮永榎塚遺跡	散布地	縄文
10	16020	御経塚シンデン遺跡	集落	縄文 弥生 古墳 中世	27	08115	福原東川遺跡	散布地	不詳
11	16031	御経塚シンデン古墳群	古墳	古墳	28	08114	宮上市左エ門館跡	館跡	不詳
12	16029	御経塚	経塚	不詳	29	08113	福増遺跡	散布地	縄文 弥生
13	16027	御経塚遺跡	集落	縄文・弥生 古代 中世	30	08140	横江C遺跡	散布地	古墳
14	16033	野代遺跡	散布地	縄文	31	08139	横江B遺跡	散布地	縄文 弥生
15		三井館跡	館跡	戦国	32	08137	横江館跡	館跡	中世
16		堀内館跡	不詳	縄文 中世 近世	33	08138	横江A遺跡	散布地	縄文 弥生 古墳 古代
17	08048	田中ノダ遺跡	集落	弥生 古墳	34	08135	横江庄遺跡	花園	古代
	08046	尊福寺遺跡	寺院跡	中世					

第1表 遺跡地名表

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

三日市A遺跡の調査は、平成18年度と平成19年度に行われた。平成18年度調査区は、南北調査区間に道路を挟み、道路北側を北調査区、道路南側を南調査区に分けて調査を進めた。北調査区の北端と調査区南の南端の2カ所に座標基準杭を打ち、調査区面積は二つの調査区を併せて480㎡である。平成19年度調査区は東西方向調査区内在が2つの排水路で3分割された。グリッド番号はA0～A4区、B5区～B7区と呼称した。調査面積は490㎡である。遺構番号は、溝、土坑、ピットで表示して順次付けた。平成18年度の遺構実測図は直営で作成し、平成19年度は航空写真測量で実施した。

第2節 基本土層

平成18年度の北調査区北と南調査区共に、基本土層は1層が耕作土の灰色粘質土（黄褐色土を含む）で厚さ約0.15～0.20m。2層が遺物包含層の暗褐色粘質土で厚さ約0.15m程度である。地表から約0.3m程度の深さで地山面に至り、地山は黄褐色粘質土である。

第3節 平成18年度調査の遺構と遺物

1. 遺 構

平成18年度の北調査区・南調査区の遺構名称・番号は、調査時検出の遺構番号を踏襲した。

北調査区では、掘立柱建物、土坑、溝などが検出された。

掘立柱建物 SB01 北調査区の北側に存在する。柱間が2間（4.5m）×1間（2.2m）の柱組で、柱穴の深さは0.13mから0.28mと浅い。

土坑 SK01 楕円形の形状で長径2.5m、短径2.4m、深さ約0.1mを測る。覆土は1層が暗褐色粘質土、2層は黄褐色粘質土で1層のブロックを少量混入し、覆土中には自然礫が多数含まれていた。時期不明。

土坑 SK02 長径0.8m、短径0.5m、深さ0.38mを測る。覆土は1層が暗褐色粘質土、2層が暗褐色粘質土で地山の黄褐色粘質土ブロックを少量混入する。3層は暗褐色粘質土で地山の黄褐色粘質土を多量に含む。

溝 SD04 調査区南側で検出され、調査区外へ延びている。幅約1mで長さ約8m分を確認した。深さ約0.1mである。なおこの溝SD04に切られている細溝は幅約0.3～0.4mで深さ0.05mであるが、約1.7～1.8mの間隔で北方向へ延びていた。覆土は4層堆積していた。

溝 SD05 調査区内で北東～南西方向に伸び、埋没後再掘削して調査区西部で北折している。幅約1.8m、深さ約0.7mで、内部は二段に掘り下げられている。調査区北端の壁面で覆土は9層確認できた。覆土上部に耕作土と遺物包含層が堆積している。ただし北折部分での土層観察から、最初に幅広の溝が掘削され、それが埋没後、溝北側に上端幅で0.85m、下端幅で0.6m、深さ0.57mの溝を再掘削している。

その他小穴 溝 SD05 の南北に小さいものや大きな落ち込み状の遺構が存在するが、その性格は不明である。

南調査区で検出された主な遺構は溝跡と土坑である。

溝 SD01 南調査区の東側地点に南北方向へ延びる。幅は最大2.2mから最小1.3m、深さ0.45mを測る。覆土は下層に暗褐色粘質土（黄褐色土ブロックを含む）が堆積し、その上に上層の暗褐色粘質土（茶色味強し）が堆積している。

溝 SD02 この溝は途中五つに途切れているが、本来は一本の溝と推定される。長さは約32m分残っていた。幅は約0.2m前後で、深さは約0.1mを測る。覆土は暗褐色粘質土である。

溝 SD03 この溝は溝 SD01 と溝 SD02 の間に平行して存在し、長さ23m分残っていた。幅、深さ、覆土の状態は溝 SD02 と同様である。

その他の遺構 調査区西側に不整形な落ち込み遺構が存在した。性格が不明である。

2. 遺物

第9図12以外は北調査区出土遺物である。

北調査区溝 SD05（第9図1～9） 1は珠洲焼底部で、底径9.2cmを測る。内外面はナデ調整で平滑に仕上げているが、外面の下端はヘラ削りされ、底面には静止糸切り痕が残る。色調は内外面共に灰白色を呈している。2は加賀焼底部で、推定底径が16.4cmを測る。外面と底面には削り痕が残るが、内面は平滑に仕上げている。3は土師質小皿を利用した土師質紡錘車で、口径8.0cm、器高1.2cm、外面底部は指ナデ圧痕が残るが、内面はナデ調整をしている。口縁部先端は尖り気味に指ナデ調整している。底部に径7.6cmの孔が穿たれている。色調は橙色を呈する。4～6は土師質の小皿で3点存在する。4は口径7.4cmを測る。内外面とも指ナデ調整をしている。器高は推定約2.0cm程度と推定される。色調はにぶい黄橙色を呈する。胎土に海綿骨針が含まれる。5は内外面共に指ナデ調整をしている。口径7.0cmで、器高は1.3cmほどと推定される。色調は橙色を呈する。6は小片であるが推定口径7.0cmを測る。器高も推定で1.2cmほどと推定される。7は輪の羽口の破片である。外径は9.4cmを測り、内側に楕円形の長径で5.6cm程度の孔が存在する。厚さは最大で3.2cmを測る。内面の色調は橙色であるが、外面は黒褐色から灰褐色を呈する。工具や指ナデで成形している。鉄滓も出土しており、周辺で小鍛冶が行われていたのであろう。8～9は打製石斧である。石材は8・9共に安山岩である。8は基部を欠くが刃部が残っている。長さ10.5cm、幅7.9cm、重量は222gを測る。表面に自然礫の表面を残している。側面は敲打によって剥離させ形を整えている。刃部は使用により摩滅している。9は逆に刃部を欠いている。作りは8と同様である。長さ8.8cm、幅7.55cm、重量は157gを測る。

包含層出土遺物（第9図10～12） 10、11は調査区北の壁面精査で出土した肥前産の碗類で、12は調査区南で出土した陶器皿である。10は肥前産の碗で、高台径3.5cmを測る。胎土は堅緻である。素地の色調は灰白色で釉薬は灰白色で透明感はない。外面に呉須による文様が描かれるが、呉須の色調は青灰色で発色も不良である。高台接地部分は釉薬を掻き取っている。11は肥前産有台碗で、底径は6.6cmを測る。胎土は堅緻である。内面見込み部分に絵の一部が残る。蛇の目輪ハギも認められる。また内面の釉薬は透明感に欠けムラと気泡も認められる。色調は灰白色を呈する。外面も内面同様に釉薬の透明感が欠け、釉薬も薄く気泡も残る。色調は灰白色である。高台の接地部分の釉薬は掻き取りされている。それ以外は釉薬が掛かる。12は肥前産陶器皿である。胎土は緻密で底径は4.6cmである。胎土は緻密で釉薬は透明であるが、下地は銅緑色を呈している。内面見込み部分では釉薬を蛇の目にハギとっている。

第4節 平成19年度調査の遺構と遺物

1. 遺 構

土坑 SK01 A3区北側で検出され調査区外へ伸びている。検出された部分で長径約2mある。最大幅は1.1mあり、内部には3段のフラット面があり、深さは最深部で0.38mを測る。検出時の覆土は灰褐色土である。

土坑 SK02 A1区東端近くで検出された。北側は調査区外へ伸び、南側は溝SD03に切られている。北東-南西方向に伸び、長さ1.5m、幅1.1mを測る。内部には3段のフラットな面とピットが存在する。

土坑 SK03 A1区で検出され、楕円形の形態で、長径0.78m、短径0.58m、深さ0.23mを測る。検出時の覆土は褐色土である。

土坑 SK04・05 B5区で検出された。これは二つの土坑が切り合っているもので、南側に先に変形した長方形を呈する土坑SK05（東西長径約1.9m、南北短径約1.15m、深さは南側で0.1mから北側最深部で0.27m）が掘られ、それが埋まった後に北側に調査区外へ伸びる土坑SK04（東西2.7m、確認値で南北1.4m、深さ1.4m）が掘り込まれている。土坑SK04覆土は、1層が灰色土、2層が灰黄色土、3層が暗灰色土、4層が灰褐色砂質土（黄褐色土ブロックを少量含む）、5層が暗灰色砂質土（灰色砂質土ブロックを少量含む）、6層は灰色砂層と暗灰色砂質土の互層となり、この1～6層が堆積している。特に最下層6層の状態から土坑が埋没する前には、水が流れていたことが6層の堆積状況から推定される。土坑SK04からは遺物が出土していた。土坑SK04・05検出面の地山は明茶褐色土であるが、土坑SK04の覆土6層が堆積していたレベルから下の地山は礫層であった。溝SD04からは陶器の有台碗（第9図18）、加賀焼の壺口縁部破片（第9図17）が出土している。

土坑 SK06 B5区で検出された。北西部の一部を別のピットに切られている。楕円形の形状で長径が約1.3m、短径が約1mを測り、内部の東側には一段フラットな面を持っている。覆土は1層が褐色土、2層が灰褐色土。3層が暗灰色土（黄褐色土ブロックを多量に含む）で、地山は明茶褐色土である。

土坑 SK07 B5区で検出された。検出時の覆土は灰色土である。長さ2.7m、検出幅は約1.1m、深さ0.16mで、内部には礫が多数含まれていた。調査区東側の農道部分へ伸びている。

土坑 SK08 B5区で検出され、土坑SK07に切られている。円形の土坑で深さ約0.02mの非常に浅い遺構である。検出時の覆土は灰褐色土である。

溝 SD01 A2～A4区、B5～7区にまたがり検出された。検出時の覆土は灰色土である。全体に調査区北側へ伸びている。東端は別の落ち込み遺構や溝SD03に切られている。確認できた長さは約15m分、深さは約0.6m程度である。覆土からは石製品の未製品（第9図19）が出土している。長さ2.19cm、幅0.57cm、厚さ0.47cm、重量1.01gで、縦方向に細い一条の溝が存在する。右側面が一部欠けている。石質はメノウである。

溝 SD02 A1～A3区にまたがり検出され、西側で北折して調査区外へ伸びている。東側は途切れているが本来は溝SD03とつながる可能性が高く、延長約25mを測る。幅は約0.55～0.9m、深さは約0.1～0.2mで、検出時の覆土は灰褐色土から褐色土である。

溝 SD04 A2区で検出され、溝SD02北側に平行隣接して存在する。検出時の覆土は灰褐色土と黄褐色土である。長さ5.5m、幅約0.2m～0.4m、深さ約0.1mを測る。

溝SD05 A3区で検出された。長さ2.1m、幅0.6m、深さ約0.1m～0.2mで、調査区と直行して調査区外の北側へ伸びている。検出時の覆土は褐灰色土である。

溝SD06・07 A2区で検出された。二つの溝は調査区と直行して調査区北側へ伸びている。溝SD06検出時の覆土は褐灰色土と黄灰色土が混じっていた。溝SD07検出時の覆土は褐灰色土と灰褐色土であった。両溝は1.2m間隔で北向きに伸びている。溝SD06は幅0.15mから0.5mで深さは約0.15m前後である。溝SD07もほぼ同様な幅と深さであるが、長さ約8mほど長い。溝SD07からは轆轤かけ土師器甕（第9図14）が出土している。

P01 A2区に存在し、径は0.3m、深さ0.18mの円形ピットである。覆土中から須恵器無台杯（第9図17）が出土している。検出時の覆土は灰褐色土である。

P02 A1区に存在し、溝SD03に切られている。不整形な形態で深さは約0.1mほどである。検出時の覆土は褐灰色土である。覆土中からは須恵器蓋（第9図18）が出土している。

P03 A1区に存在する。楕円形の形態を呈し、長径0.5m、短径0.35m、内部は二段になっているが、深さは0.26mを測る。検出時の覆土は灰褐色土である。

P04 A1区に存在する。長楕円形の形態を呈し、長径0.53m、短径0.32mを測る。内部にフラットな平坦部があり、そこから底部へ下がる。深さは0.25mである。検出時の覆土は灰褐色土である。

P05 A2区に存在する。楕円形のピットで溝SD02と溝SD04を切って掘られている。底面の南北に小ピットが掘られている。南北の長径は0.75m、東西の短径は0.70m、深さは底面まで0.12m、ピット底まで0.31mを測る。

2. 遺物

A2区溝SD07 第9図13は、内外面共に轆轤掛けした土師器甕で、底径7.3cmを測る。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土には粗砂粒以外に赤色粒を少量含む。焼成は良好である。

A2区P01 第9図14は、須恵器の無台杯である。口径12.3cm、底径7.3cm、器高3.1cmを測る。胎土には微細な砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面が灰白色、内面が暗灰色を呈する。

A1区P02 第9図16は、須恵器の坏蓋で、推定口径18cmを測る。胎土に1mm程度の粗砂粒を含み、色調は灰色を呈している。

B5区土坑SK04 第9図17は、加賀焼の壺口縁部と推定される。推定口径12.9cmを測る。胎土にはやや気泡を含み、色調は灰色を呈している。口縁部の内外面は横ナデ調整され、口縁端部は窪んでいる。表面に鉄軸が掛けられている。

B3区土坑SK04 第9図18は、陶器の有台碗で、産地は不明である。底径は5.9cmを測る。胎土はきめが粗くざくざくした感じである。色調はにぶい橙色を呈している。軸葉はやや透明感に欠け掛かり方にムラがあり貫入と気泡も含まれる。色調は灰黄色を呈する。

A2区溝SD01 第9図19は、石製品である。長さ2.19cm、幅0.57cm、厚さ0.47cmを測る断面楕円形で、上面に幅約1mmの溝が作られ、右側面の一部が欠けている。重量は1.01gを測る。石質は瑪瑙である。

その他 第9図15は須恵器有台杯で、表面採集品である。口径11.4cm、底径7.6cm、器高3.55cmを測る。胎土には1mm程度の粗砂粒を多く含む。焼成は良好である。色調は内外面共に灰白色を呈する。外側底面にはヘラ記号が残る。

北調査区 S005 (1-2)

- 1 耕土 灰色粘質土(黄褐色土含む)
- 2 耕土 黄灰色粘質土
- 3 耕土 暗茶褐色粘質土(少量)
- 4 耕土 暗灰色粘質土
- 5 包含層 暗褐色粘質土
(黄褐色粘質土少量)
- 6 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土多量)
- 7 包含層 暗褐色粘質土
(黄褐色粘質土微量)
- 8 黄褐色粘質土(暗褐色粘質土微量)
- 9 暗灰色粘質土(暗褐色粘質土少量)
- 10 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土多量)
- 11 暗褐色粘質土
- 12 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土微量)
- 13 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土多量)
- 14 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土多量)
- 15 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土多量)
- 16 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土少量)
- 17 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土少量)
- 18 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土微量)
- 19 暗褐色粘質土
- 20 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土少量)
- 21 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土多量)
- 22 暗褐色粘質土(茶褐色粘質土多量)
- 23 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土少量)
- 24 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土少量)

北調査区 SD05 (5-6)

- 1 耕土 灰色粘質土
- 2 包含層 暗褐色粘質土
- 3 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土少量)
- 4 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土多量)
- 5 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土微量)
- 6 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土少量)
- 7 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土微量)
- 8 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土少量)
- 9 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土少量)
- 10 黄褐色粘質土(暗褐色粘質土多量)
- 11 暗褐色粘質土
- 12 地山 黄褐色粘質土

北調査区 SK01

- 1 暗褐色粘質土
- 2 黄褐色粘質土(1層土混入)

北調査区 SK02

- 1 暗褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土(地山黄褐色粘質土少量)
- 3 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土多量)

北調査区 P1 ~ P2、P4 ~ P8

- 1 暗褐色粘質土(地山土少量)
- 2 黄褐色粘質土(暗褐色粘質土少量)

南調査区 SD01 (9-10)

- 1 耕土 灰色粘質土
- 2 耕土 黄灰色粘質土
- 3 包含層 暗褐色粘質土
- 4 黄褐色粘質土(暗褐色粘質土混入)
- 5 暗褐色粘質土(茶色味強い)
6層 SD01 層土
- 6 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土混入)
6層 SD01 層土
- 7 地山 明黄褐色土

南調査区 SD02

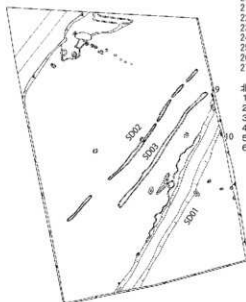
- 1 暗褐色粘質土

北調査区



(道路)

南調査区



北調査区 S005 (3-4)

- 1 暗褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土少量)
- 3 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土少量)
- 4 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土多量)
- 5 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土多量)
- 6 暗褐色粘質土(暗褐色粘質土多量)
- 7 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土多量)
- 8 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土少量)
- 9 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土微量)
- 10 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土多量)
- 11 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土多量・砂質土混入)
- 12 暗褐色粘質土
- 13 暗褐色粘質土(暗褐色粘質土少量)
- 14 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土少量)
- 15 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土多量)
- 16 黄褐色粘質土(暗褐色粘質土微量)
- 17 暗褐色粘質土
- 18 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土少量)
- 19 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土微量)
- 20 暗褐色粘質土(炭多量)
- 21 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土微量)
- 22 地山 黄褐色粘質土
- 23 暗灰色砂質土

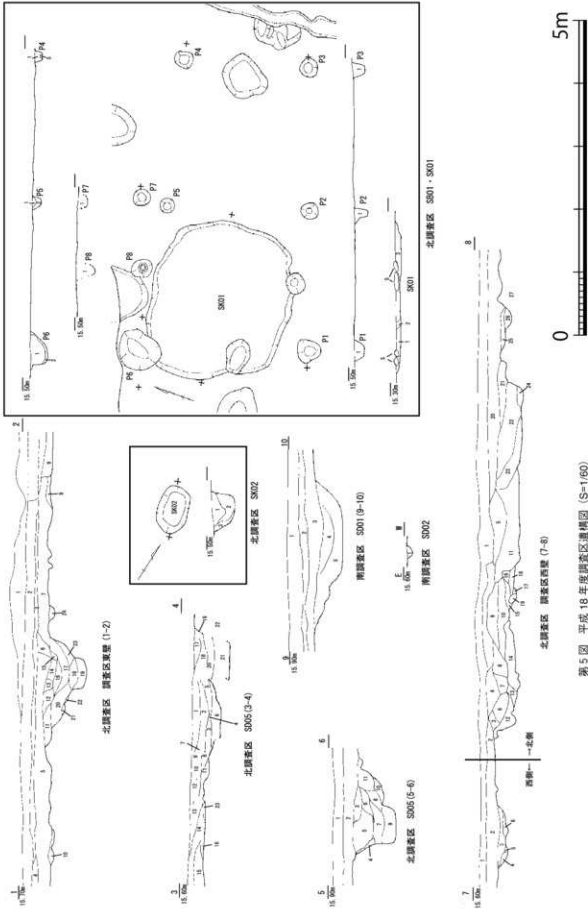
北調査区 SD04 (7-8) (北側)

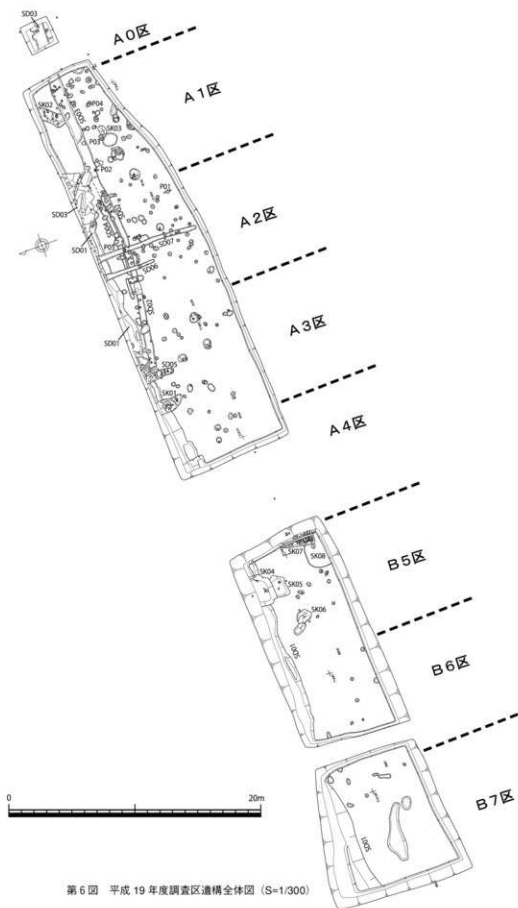
- 1 耕土 灰色粘質土
- 2 包含層 暗褐色粘質土
- 3 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土少量)
- 4 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土多量)
- 5 暗褐色粘質土(暗褐色粘質土多量)
- 6 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土微量)
- 7 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土多量)
- 8 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土多量)
- 9 暗褐色粘質土(暗褐色粘質土少量)
- 10 暗褐色粘質土(暗褐色粘質土少量)
- 11 暗褐色粘質土
- 12 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土微量)
- 13 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土多量)
- 14 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土少量)
- 15 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土微量)
- 16 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土少量)
- 17 黄褐色粘質土(暗褐色粘質土少量)
- 18 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土少量)
- 19 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土多量)
- 20 包含層 暗褐色粘質土
- 21 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土微量)
- 22 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土少量)
- 23 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土多量)
- 24 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土多量)
- 25 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土多量)
- 26 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土多量)
- 27 地山 黄褐色粘質土

北調査区 SD04 (7-8) 西側

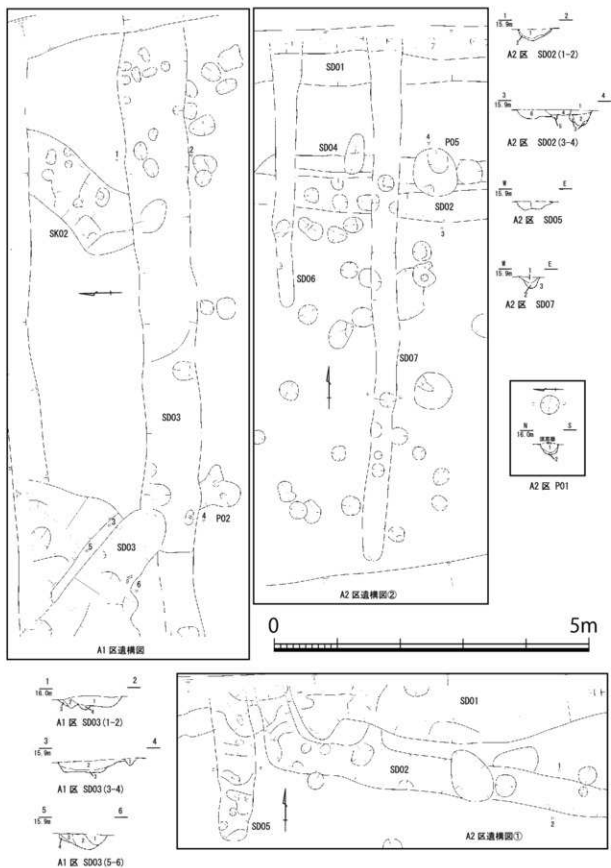
- 1 耕土 灰色粘質土
- 2 包含層 暗褐色粘質土
- 3 暗褐色粘質土
- 4 暗褐色粘質土(暗褐色粘質土少量)
- 5 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土少量)
- 6 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土多量)

第4図 平成18年度調査区遺構全体図 (S=1/300)

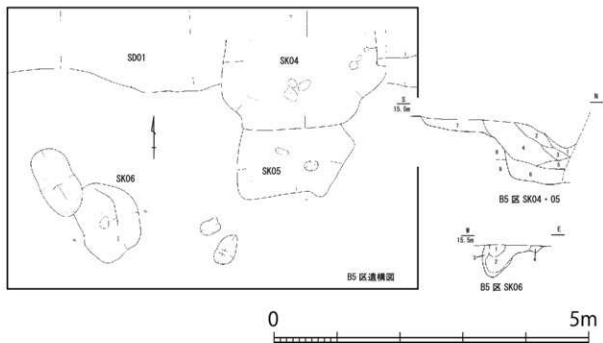




第6図 平成19年度調査区遺構全体図 (S=1/300)



第7図 平成19年度調査区遺構図(1) (S=1/60)



第8図 平成19年度調査区遺構図(2) (S=1/60)

A1区 SD03(1-2)

- 1: 褐灰色土
- 2: 灰褐色土(黄褐色土ブロック多混)
- 3: 灰褐色土
- 4: 暗灰褐色土(黄褐色土粒多混)
- 5: 地山 明黄褐色土

A1区 SD03(3-4)

- 1: 褐灰色土(黄褐色土粒多混)
- 2: 暗灰褐色土
- 3: 褐灰色土
- 4: 地山 明黄褐色土

A1区 SD03(5-6)

- 1: 暗灰褐色土
- 2: 褐灰色土(黄褐色土粒少混)
- 3: 暗灰褐色土(黄褐色土粒少混)
- 4: 暗灰色土(黄褐色土粒多混)
- 5: 地山 明黄褐色土

A2区 P01

- 1: 褐灰色土(黄褐色土ブロック少混)
- 2: 褐色土(黄褐色土ブロック多混)

A2区 SD02(1-2)

- 1: 暗灰褐色土
- 2: 暗灰色土(黄褐色土粒多混)
- 3: 地山 明黄褐色土

A2区 SD02・P05(3-4)

- 1: 暗灰褐色土
- 2: 褐灰色土
- 3: 暗灰色土(黄褐色土ブロック多混)
- 4: 灰褐色土(黄褐色土粒少混)
- 5: 暗灰色土(黄褐色土粒多混)
- 6: 褐灰色土 SD02 覆土

A3区 SD05

- 1: 褐灰色土
- 2: 地山 明黄褐色土

A2区 SD07

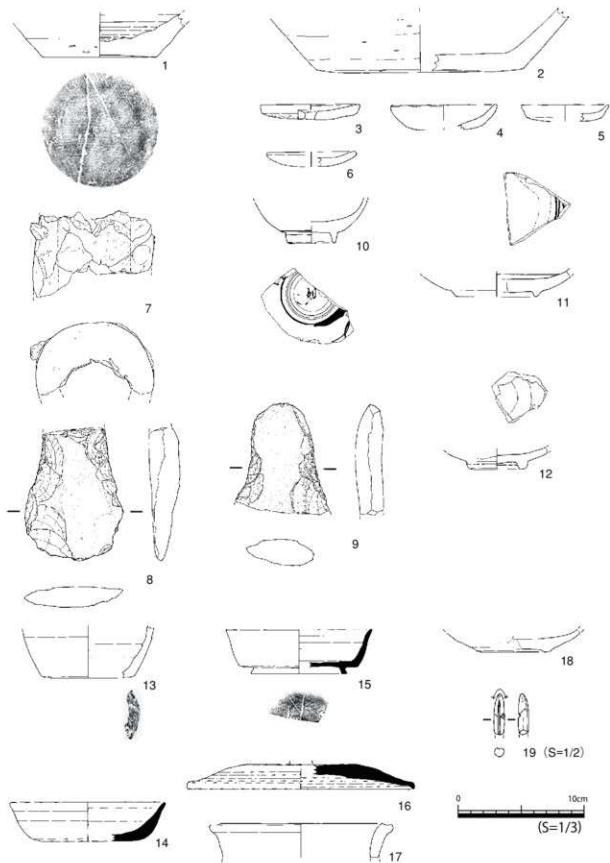
- 1: 暗灰褐色土
- 2: 灰褐色土(黄褐色土ブロック多混)
- 3: 地山 明黄褐色土

B5区 SK04・SK05

- 1: 灰色土
- 2: 灰黄色土
- 3: 暗灰色土
- 4: 灰褐色砂質土(黄褐色土粒少混)
- 5: 暗灰色砂質土(灰色砂少混)
- 6: 灰色砂と暗灰色砂質土の互層
- 7: 褐灰色土(黄褐色土粒少混)SK05 覆土
- 8: 地山 明黄褐色土
- 9: 地山 礫層

B5区 SK06

- 1: 褐灰色土
- 2: 灰褐色土
- 3: 暗灰色土(黄褐色土粒多混)
- 4: 地山 明黄褐色土



第9図 出土遺物実測図 (1~18: S=1/3, 19: S=1/2)

第4章 総括

今回の二級河川安原川広域河川改修に係る三日市A遺跡の調査では、弥生時代後期や古代の竪穴建物は検出されなかった。建物は平成18年度北調査区掘立柱建物SB01（1間×2間）の小規模なもの以外には存在せず、溝、土坑、小穴等の遺構が中心であった。時期的には、平成18年度北調査区溝SD05出土の2点の打製石斧（第9図8、9）が縄文時代晩期頃から弥生時代頃のものとして推定されるが、これが今回の事業地内から出土した遺物で一番古い時期の遺物である。打製石斧で刃部が残る第9図8は、刃部両面が摩耗しており、土掘り具として使用していたことが推定される。ただし、打製石斧に伴う縄文土器が出土しておらず、縄文・弥生のいずれか所属時期は特定できない。近隣に縄文時代後期から弥生時代初め頃の集落が存在している可能性がある。

平成18年度調査区

北調査区溝SD05からは、中世の珠洲焼や加賀焼、土師質小皿以外に輪の羽口の破片が出土している。溝SD05からは比較的多くの鉄滓が出土しており、この調査地周辺で中世頃に小鍛冶が行われていたことを示している。この溝SD05北側には1間×2間の掘立柱建物SB01の存在が確認された。この建物は小型で柱穴もやや浅いが、溝SD05の北側に平行して存在していることから、溝SD05以北が居住域でその地域を区画する溝であった可能性が高いと推定される。掘立柱建物SB01は、土坑SK01埋没後に建てられているが、土坑SK01は覆土内に握り拳大から人頭程度の自然礫が多数含まれており、出土状況から人為的に投棄したものと推定されるが、投棄理由は明らかではない。南調査区の溝SD01も区画溝ではないかと推定されるが、遺構は少なかった。

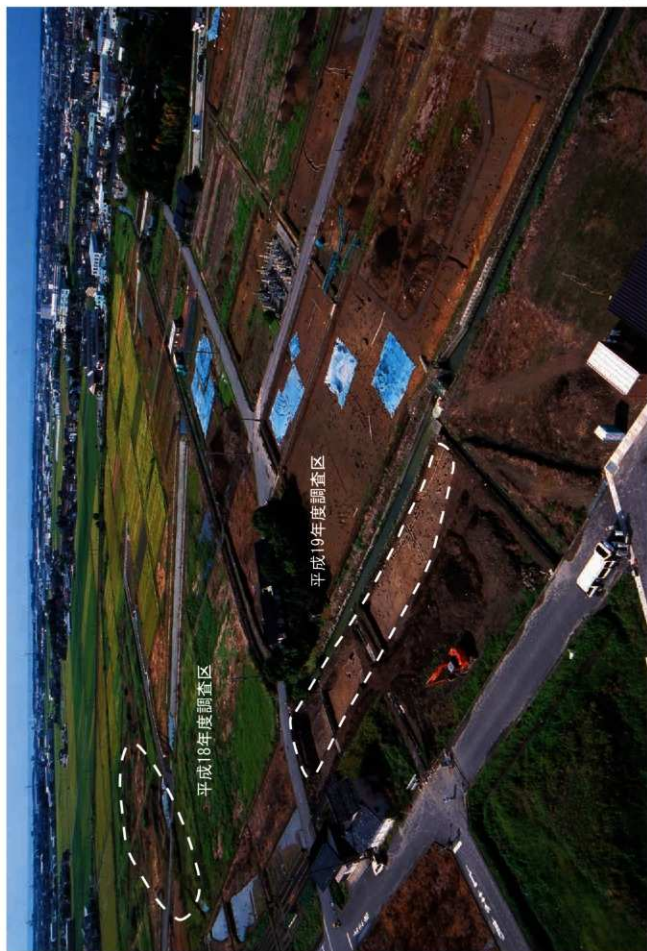
平成19年度調査区

平成19年度調査区は、平成18年度調査区の南東方向に当たる馬場川南側沿い地点で、溝、土坑、小穴等が検出された。出土遺物量は平成18年度調査区よりも少ないが、須恵器が存在していた。須恵器もその坏身の底部からの立ち上がり角度の形状や高台部、坏蓋口縁部の先端返し部分の形態等からすると、古代でも8世紀代のもので推定される。平成19年度調査区は遺物量が少ないが、この時期頃が主体になるであろう。また須恵器坏底面にヘラ先による「ヘラ記号」が残されているものが1点存在した。

今回の2カ年の調査で、平成18年度調査地点と平成19年度調査地点間は約120m離れており、広い三日市A遺跡の中でも調査地点ごとに営まれた時期が異なることを示している。

参考文献

- 大西 顕 2010 『横江D遺跡』『石川県埋蔵文化財情報』第24号（財）石川県埋蔵文化財センター
- 徳野裕子 2009 『徳用タケダ遺跡1』石川県野々市町教育委員会、野々市町西北部土地区画整理組合
- 中泉絵美子 2009 『二日市イシバチ遺跡』『石川県埋蔵文化財情報』第22号（財）石川県埋蔵文化財センター
- 宮川勝次 2007 『三日市A遺跡』『石川県埋蔵文化財情報』第17号（財）石川県埋蔵文化財センター
- 安 英樹 2008 『二日市イシバチ遺跡』『石川県埋蔵文化財情報』第20号（財）石川県埋蔵文化財センター
- 安中哲徳 2008 『三日市A遺跡』『石川県埋蔵文化財情報』第19号（財）石川県埋蔵文化財センター
- 吉田 淳・横山貴広ほか 1989 『押野タチナカ・押野大塚遺跡』石川県野々市町教育委員会
- 吉田 淳・横山貴広 2001 『御経塚シンデン遺跡・御経塚シンデン古墳群』石川県野々市町教育委員会、野々市町御経塚第二土地区画整理組合



三日市A遺跡遺景（平成19年撮影、南東側上空から）



北調査区 SB01 (東から)



北調査区 SD05 セクション (東から)



北調査区 SK01 (北から)



北調査区 SD05 遺物出土状況



北調査区 完掘 (北西から)



北調査区 SD05 と北半の遺構群 (西から)



北調査区 SD05 と北半の遺構群 (東から)



北調査区 南半の遺構群 (西から)



南調査区 完掘（北から）



北調査区 SK01 遺構検出時の状況



A 1～4区実掘 (東から)



A 1～4区実掘 (西から)



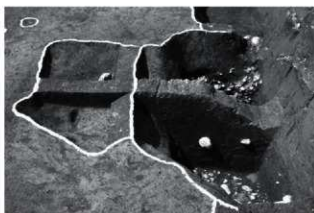
B 5～7区実掘 (東から)



B 5～7区実掘 (西から)



A 2区 SD06・07



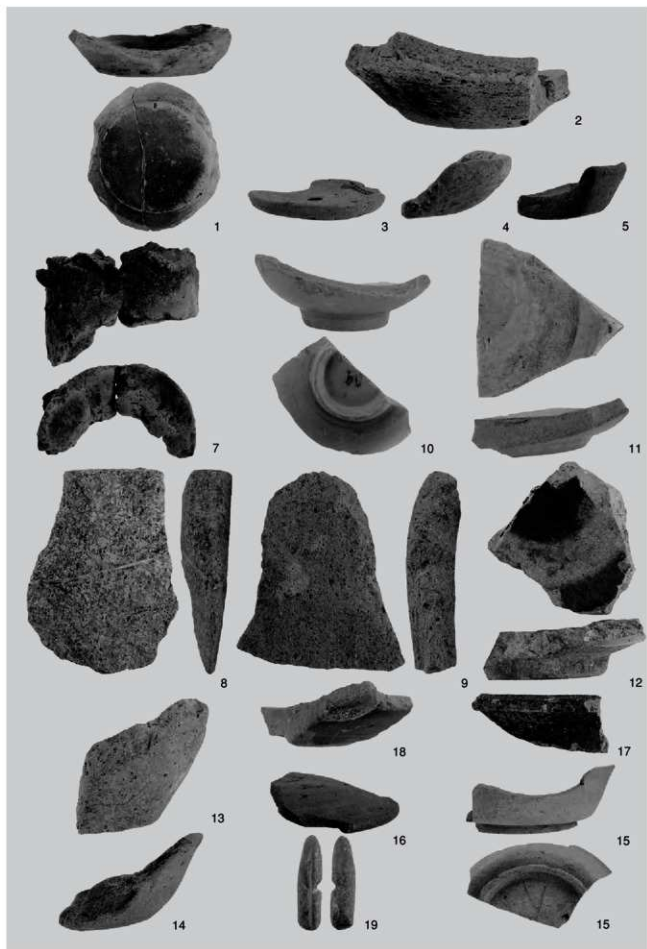
B 5区 SK04・05



B 5区 SK06



A 1区 SD03



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	のいちし みっかいちAいせき							
書名	野々市市 三日市A遺跡							
副書名	二級河川安原川広域河川改修事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	米澤義光							
編集機関	財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL (076) 229-4477							
発行機関	石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	西暦2012年3月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
三日市A遺跡	石川県 野々市市 三日市町	17212		36度 32分 13秒	136度 35分 46秒	20060803 ～ 20060904	480㎡	記録保存 調査
				36度 32分 14秒	136度 35分 40秒	20070820 ～ 20070918	490㎡	
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
三日市A遺跡	集落	古代、中世、 近世	掘立柱建物、土 坑、溝、小穴	須恵器、中世土師 器皿、珠洲焼、近 世磁器、石製品		遺跡北西縁辺部を 調査した。		
要約	<p>三日市A遺跡の北西域にあたる。古代から中世の集落跡で、掘立柱建物、土坑、溝などの遺構を確認した。平成18年度調査区は南北二つの調査区に分かれる。北調査区からは居住域を区画する溝 SD05のコーナー部分が検出され、その溝で囲まれた内側から掘立柱建物、土坑等が検出された。なお溝 SD05内からは鉄滓が出土しており、周辺で小鍛冶が行われていたことが推定される。遺構の時期は中世～近世と推定される。南調査区からは直線的に延びる溝が検出されたが出土遺物が僅かで、遺構の時期は不明である。</p> <p>平成19年度調査区は馬場川南側沿い地点を調査した。溝、土坑、小穴等が検出されたが、時間的には少量であるが古代の須恵器が出土しており古代の時期と推定される。同じ三日市A遺跡であるが、同一遺跡でも地点により営まれた時期が異なることが判明した。</p>							

野々市市 三日市A遺跡

発行日 平成24（2012）年3月30日

発行者 石川県教育委員会

〒920-8575 石川県金沢市稲月1丁目1番地
電話 076-225-1842（文化財課）

財団法人石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
電話 076-229-4477

E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 田中昭文堂印刷株式会社